

パリ日記(五)

『ももんが』一九九〇年九月号

一九五〇

九月三日 日曜

少し雲が濃いがヴェルサイユへ行くことにする。ゴブランの辻から83のバスへ乗ればアンヴァリッド驛前へ出られることを覚えたから待つてみたが中々来ないので歩いてしまった。ヴェルサイユ行は汽車でなく電車だった。途中ムードンで稍長いトンネルを通る。この丘の上にムードンの天文台があるだらうと思ふ。三十分位でヴェルサイユへ着いた。驛前で新聞紙みたいな案内を買ひ、少し歩いて行つたらすぐ宮殿の前へ出た。

宮殿を見る前に庭園を見る。東の端まで行つて見る。サン・マルシュといふ大きな石段がある。文字通り百段あるかどうか数へてはみなかつたが、だいぶ高い階段である。こんなところを歩いてゐる人は余りなかつた。圍ひの外を見渡すとちよつと沼澤地があつて、その向うに廣々とした森がある。戻つて宮殿を見る。フォンテンブローと同じやうに三四十人づつに区切つて説明がつく。種々の部屋がある。やがて有名な鏡の間といふのである。その名のやうに壁は大きな鏡になつてゐるが、惜しいかなその鏡は余りよい平面ではない。像がだいぶ歪んで見える。一九一九年の講和條約の署名のとき使つたテンプルといふものも見た。「戦争の間」といふのがあつて、フランスの武将の肖像や胸像が沢山ある。ナポレオンの戦つた主な戦争の大きい繪が並べてある。

外へ出ると雨が降つてゐる。レインコートは持つて来たが傘は持つて来なかつた。さつき買った新聞紙大の案内書を頭の上へ載せて歩く。雨具は持つてゐない人が多いので濡れるにも連れがある。美しい庭園を見ながらトリアノンの方へ行く。庭の所々に彫像が立つてゐる。こんもりと茂つた木立の中を抜けてネプチューンの泉水の前へ出る。其処から左へ曲つてアヴェニユー・ドウ・トリアノンをグラン・トリアノンの方へ行く。時計を見ると二時にまだ少し間がある。開くのを待つてゐる人がアーケードに立つてゐる。その前の方の木の下にパンなどを賣つてゐる屋台店があつたので、サンドウイッチを買つて頬張る。例の棒のパンを二つに割いてハムを挟んだものだ。長さは十四五センチあつた。六十フランで安くはない。皮がぼりぼりして変つたサンドウイッチだがつまかつた。

グラン・トリアノンではやはり王様の部屋とかグラン・サロンとか、それらの部屋々々にある豪華な家具などを見た。ここを出てプティ・トリアノンへ行かうとするとすぐ左手に馬車の博物館といふのがあるので入ってみる。ナポレオンやジョゼフィンなどが乗った大きな馬車が数台あり、周りに馬具などが沢山並べてある。それからプティ・トリアノンへ出る。ここでもいくつかの美しい部屋や家具をみる。

雨が小降りになった。グラン・キャナルの方へ出てアポロンの泉水を見る。宮殿の方へ戻ると十六時から噴水を出すといふ掲示をちようど張り出すところだった。今が三時半、まだ三十分ある。小雨はまだ残つてゐるし、雨の中で噴水を見るのも少し興ざめた感じがする。それにあの泉水に水が噴きあがるところはいくらか想像できる。もう帰ることにする。驛へつくと三時五十分の電車があつた。四時十五分ごろアンヴァリッドへ着く。モン・パルナスへ出る線もあるのだが今朝と同じ線を歸つた。

アンヴァリッドからゴブランまでバスに乗る。五区で五十フランだから余り安くない。地下道へ入るのが面倒だけれどもメトロなら二十フランですむ。メトロで感心したのは地下道の案内が周到なことである。目的の驛名とその線の両終点の名を知つてゐれば間違ふ氣遣ひはない。歩くところは一方向きで逆行を許さないから指示通りに歩けば間違ひない。また一方向きだから人と人とぶつかるともない。ホームへ出ようとすると口には自動的に開閉する鉄柵があつて、電車が入つて来るときは閉ぢてしまふから飛乗りなどは絶対にできない。発車すると自動的に開く。地下鉄が三本ぐらゐ交叉してゐるところは珍しくない。さういふ所の地下道は三次元的にかなり複雑な筈だが、幾何学の発達したこの國ではそんなことは何でもないどころか、寧ろお得意であらう。そのあらゆる乗り替へに対して手の届いた道案内が書いてある。地下道が少々長くなるのは已むを得ないことであらう。そのためか氣の短い人は高いバスに乗るのであらう。バスはかなり混んでゐることがある。メトロはずるぶる沢山の線があるからたいいところはこれを利用して行かれる。どれもそんなに混んではゐない。

道を歩いてゐるとジャン・ギャバンのやうな顔をした若者がある。女性ではさういつた代表的な顔が思い出せない。死んだコリーヌ・リュシエールのやうな娘にも、またフランソワーズ・ロゼーのやうな小母さんにもまだ遣はない。若い娘が頭のうしろの方を刈り上げてうへの方をふさふさしてゐるのは涼しい感じがする。ミニステール・ドゥ・ランテリユールで丁寧な教へてくれた赤い上衣のお嬢さんもさういふ頭をしてゐたやうな気がする。

九月四日 月曜

コンコルドまでメトロに乗りガブリエル街のアメリカ大使館へ行く。玄関に旗が立つてゐて門がしまつてゐる。大使館だから旗が立つてゐるのかと思つたが、土曜日にはなかつた。門の内側にゐる守衛に旅券の査證に來たのだがといふとホリデーだといふ。今日がかときいたら、レーバーデーだといふ。なるほどさういふのがあつたつけ。明日來ると言つたら九時に開くと教へてくれた。今日は久しぶりでアメリカの発音をきいた。

セーヌ河畔をぶらりぶらりとトロカデロまで歩く。博物館へ入る。これはモニュマンのミュージーだ。寺院の彫刻やまた寺院全体のモデルが沢山ある。フランス中の有名なものが集めてあるらしい。ノートルダムもある。實物を見ても気がつかない細部を観察することができる。昔の礼拝堂のモデルなどもある。壁画の模写もだいぶあつたが、これは何だか汚ならしく余り面白くなかつた。建築モデルは非常に面白かつた。

少し休んでもう一つの博物館を見る。これはミュージー・ドウ・ロムつまり人類学博物館だ。世界各地の人類学の資料が集めてある。アフリカや印度シナに関するものはさすがに豊富である。その他の部分でももちろん豊富であるが、これらは特に多いと思われたい。アジアの部分では日本の雜人形や茶の道具などが出てゐた。写真はもと鉄道省の觀光課で作つた見覚えのあるのが出てゐた。焼きつけが余り上等ではなかつたし、選擇もまだ考慮の余地があると思はれた。アメリカの資料もあり、インカ帝國の遺物などもあつた。この博物館も面白かつた。

その近くに水族館があつたのでついに入つてみる。種類はあまり多くなかつた。金魚があつた。「ポアッソン・ジャポネー」と書いてあつた。

今日はだいぶ涼しい。下シャツを二枚着て出たらちようどよかつた。お爺さんなどはもう薄い冬外套を着てゐる人がたまにはゐる。それから町で片腕の人や義足の人を時々見る。第二次戦争で傷ついた人だらうか。博物館でもさういふ人たちを幾人か見た。パリには博物館が多いからさういふ人たちの職場として適當であらう。これは國家的に考へてゐることに違ひない。

今日はアラゴーが休みなのでサン・マルセル街のオウ・プティ・マルゲリーといふホテル・レストランで夕食をとつた。これも安いうちだ。サン・マルセル街を少し歩く。映画館があるので看板を見ると朝鮮の戦争のニュースがあるといふから入つてみる。ニュースは極く短いもので、爆弾を落とすところ、負傷兵を運ぶところだつた。短篇に本を作るころがあつた。先づ著者が原稿を書くところから始まる。隣りの室が騒がしいので静かにして呉れとどなつたり、それでも静かにならないので耳に栓をして書くこと

る。それからライノタイプで活字がざくりざくりと落ちて植字される。印刷、製本の工程がよく分かるやうに説明される。本が出来上がつて賣り出される。著者が出版者のところへ原稿料を貰ひに行くと、あの本はどうも賣れませんでした、と断はられ著者が澁面を作るといふ趣向である。なかなかスマートな文化映画である。もちろん見せどころは植字、印刷、製本の過程である。次にアコーディオンと歌があつた。次の劇映画はさつぱり分からなかつた。

九月五日 火曜

天気がよくないが降るほどでもない。十時頃アメリカ大使館へ行く。昨日が休日だから混むのは当たり前かも知れないが、だいぶ待たされた。順番が来てフィリップン通過の査證を貰いに来たといふと、二時から来いといふ。二時に行つたらもう十人くらゐ立つてゐた。それを待ちさつきの受付の人のところへ出ると旅券と切符を向うの方へ持つて行き、やがて戻つて来てかかりの人がゐないから暫く待てといふ。少し待つてゐたら今度は明日十時に来いといふ。それで三時になつた。宿へかへる。疲れた。それから宿で學會の報告を書く。

九月六日 水曜

十時少し過ぎにアメリカ大使館へ行く。三十分位待つた。呼び出されたから行くと言つて申請書をタイプでポンポン打つてくれる。子供があるかといふから三人あると言つたらびつくりした表情をした。女の係員だ。それから向うで待つてゐるといふ。少し待つて呼ばれた。行くとフィリップンの領事らしい人のところ連れて行かれた。名前をきいてから「スウェーア？」といふ。何の事かと思つたら、申立に間違ひなしと宣誓するかといふのだつた。手をあげて間違ひなしと言ふ。そしたら向うで待てといつた。しばらくすると女の係員がそれで済んだといつて旅券を返してくれた。金はとらなかつた。時間はずるぶんかかつた。

一旦宿へかへり、今朝もらつたセルジエスク教授の手紙に返事を書く。七日の晩にうちで食事を共にしたいといふので、喜んで行くと言ふ。サン・マルセル街のオウ・プティ・マルグリーといふレストランで晝食をとる。このうちは安いが、安いだけの違ひはある。皿が熱いから気をつける。「アタンシオン」といふ。かういふうちでは料理を皿に粧つて野菜まで添へたのをそのまま冷めないやうにオーヴンへ入れておくのである。さうして注文があると出してくる。だから皿が熱いのである。サラダ菜もぐつたりしてゐる。そのほか肉の吟味もわるいし、馬鈴薯の揚げ方でも一様でなく、揚げ過ぎで焦げたのも混つてゐるといふ具合である。アラゴーでは「アタンシオン」は出なかつた。

二時になつたから近くの郵便局へ行つてうちへ電報を打つ。「チバケン、イチカハ」と書いたら印刷物を出して頻りに探してゐる。

そのページが切つてないので切つてゐたのは愉快だつた。日本の地名など必要なかつたのであらう。中々見つからないので、東京中央電信局宛てでよいと思ふから「トウキョウ、イチカハ」としようと言つたら納得した。十五語三三三五フラン、一語二〇九フランだ。このあひだ東京からパリへ打つたのが確か一語二〇七円だつたと思ふから大差ない。それからパリ市内の手紙を出したら十五フランだつた。これは日本よりだいぶ高い。

ポール・ロワイヤール街の宿の近くに小さな散髪屋があつたから入る。耳の上やうしろの方を刈つてやめようとするらしいから、上の方も少し短くしてくれと言つたら、ずいぶん短いぢやないか、これでいいだらうと言ふ。そこで「ア、ウイ」と言つた。フランスの人が話しているのを聞いてゐると頻りに「ア、ウイ」といふ。それが中々うまく出ないのだが、今日はそれを應用したのだ。それから後ろの方を剃つてくれて顔は剃らない。自分で剃るのが当り前ならう。終つて眼鏡をかけるといい、合せ鏡で後ろを写して見せて、これでいいかととき。中々合理的だ。「ボン！」それからオー・ドウ・コロンをふりかけ、櫛を入れて波形をつけてくれた。いくらかときくと二一〇フランだつた。金を拂はうとするにあちらへと指し示す。なるほどそちらに親方がある。お釣から五十フラン置いたら、親方がこれはあのムツシュへかと言って刈り方の方へ目を移した。うなづくと「メルシー、ムツシュ」と言つた。それに應じて刈り方も「メルシー、ムツシュ」と言つた。なるほど！チップは刈り方にやるべきもので、親方にやるべきではないだらう。だいぶ学問をした。さよなら。

宿へ戻つて學會の印刷物を読む。

九月七日 木曜

昨夜は強い風が吹いた。雨はない様子だつた。なかなか寝つかれなかつた。今朝起きて窓を見ると雨も少し降つたらしい。風はだいぶをさまつたが雲は動いてゐる。外へ出てみると鈴懸の小枝が吹き折られて落ちてゐるのがあるからかなり強い風だつたことが分る。今日はヴァンセンヌの森へ行かうと思つてゐたが、天気がわるいからやめた。近くの植物園へ行つてみることにする。とばくちまでは何度も入つたが、まだ奥の方まで行つたことがない。入つてすぐのところはラルクの像がある。そこを真直ぐ入つた奥の建物の正面にビュッフォンの像がある。そこから右の方へ行くと大きなガラス張りの温室がある。もう少し行つたところにベルナルダン・サンピエルの像がある。も

う少し先に動物園がある。うつかり歩いて行つたら、横の方に切符賣場があつて、中からガラスをとんとん叩いて咎められた。切符を買はなくてはいけなかつたのだ。入口がはつきりしてゐないからだ。金を出して動物を見たくもないから済まして引き返した。

小さな売店があつて繪はがきなどを売つてゐる。学者の像はないかときいたら、さっきのベルナルダン・サンピエルのともう一枚出して来た。もう一枚は誰のと言ふのでなく、最初の芸術家と題する像で、すぐそこに立つてゐるあれだといふ。ラマルクやビュッフォンのはなかつた。欲しいものはないものだ。

すぐ近くに古生物学の博物館があるが十三時半から十七時まで開くと書いてある。外へ出てサン・ジェルマン通りを歩く。雨が降つて来たのでジャルダンの西側を廻つて歸らうとしたらメトロのジュッシュー驛の入口へ出た。その近くに本屋が見えたので覗き込む。ジャルダン・デ・プラントの近くだけあつて動物や植物の本が多い。そこを見てゐるうちに小降りになつたので、宿へ帰るのをやめてソルボンヌの方へ歩き、本屋を片端から覗いた。ソルボンヌの古本屋にフランスの化学の本を日本で訳したのがあつた。留学生でも賣りとばしたのか。それにしてもそれをちゃんと飾つてあるのが面白い。かういふ本も買ふ人があることの可能性を豫想すればこそ並べておくのであらう。パリは廣い。

このあひだ歴史学のコンGRESに来たとき目についた本屋を見て歩く。暫く歩いてゐるうちに大雨になつたので、或る本屋の軒先で雨宿りをする。いくらか小降りになつたのでクルーニの驛からメトロにのらうとしたらこの驛は休止であつた。少し行つてオデオンの駅の入つたら何だか様子がちがふのでよく見廻したら、其処は切符を持つてゐる人の入口だつた。もう少し先へ行つて一般の入口から入る。ゴブランで下りる。

サン・マルセル街の昨日のうちで晝食をとる。雨が殆んど止んだのでまたソルボンヌへ行き本屋廻りをつづける。サン・ミシエルの露店で封筒を買つたら、ゴムが引いてあると説明してゐたから、近頃まで日本のやうに糊のついてゐない封筒が賣られてゐたのに相違ない。サン・ジェルマンの本屋を覗きながら、植物園の方へ行く。古生物の博物館を見る。なかなか立派な標本がある。次に奥の方の動物学の博物館を見る。実に多くの標本がある。専門家が見たらしいものらしい。もう一つ地質鑛物の博物館を見る。入るときもう三十分しかないがいいかと念を押してゐた。いいと言つて入る。中々行き届いたものだ。鑛物の立派な標本がある。博物関係はこれで卒業といふことにしよう。

「ソワール」を買つて宿に歸る。北鮮軍が馬山の近くまで迫つてゐる。大邸は保ち應

へてゐる。ポーハンといふのは昨日の新聞で既にとられてゐたが、これは漢字でどういふ処だったか思い当らない。飛行機の事故でジャーナリストが三人死んだとある。

七時四十五分に宿を出てセルジエスク教授のところへ行く。途中で葡萄を少し買って風呂敷へ包んで持つて行く。これは土産のもりではなかつたが日本ではかういふ風に使ふので、これは日本の絹だからよかつたら使つて貰ひたいと言つて風呂敷ことあげた。昔一高にゐたフランス語の先生が日本の風呂敷を便利だといつて使つてゐた話を思い出したからだ。そしたら教授が日本の絹を一つ持つてゐると言つてネクタイを出してみせた。

座にH教授がゐて紹介された。ルーマニア人だが今はアメリカのF大学にゐるといふ。歴史学の會議に出席して明日かへる由。日本の学者に會ひたいといふので、教授が今日我々二人を呼んでくれたのだ。H教授は新渡部さんを知つてゐるさうだ。また或る古い外交官を知つてゐた。日本人は「モシモシ」だの「アソーデスカ」とよく言ひますね、などといふ。中々日本通だ。S教授夫人とべらべら話してゐるのを傍からあればポーランド語だとS教授が注釈してくれる。

夫人の手作りのルーマニア風料理を御馳走になる。教授が何処で食事してゐるかといふので、レストラン・アラゴーへよく往くと答へたら、あそこは中々いいと言つてゐた。フランスの食事はどうかといふ。非常に結構だ、日本で洋食を勉強して来たといつたら笑つてゐた。それから米を煮たのが出た。これは自分への御馳走ださうである。米を牛乳で煮て大粒の紫の葡萄を三つ四つあしらつたものである。米の飯の概念からは相当の距離がある。S夫人の創意に成る料理かも知れない。早速お礼を言ふべきところだが、特別うまいとは言へなかつた。考へてゐるうちに夫人が隣の部屋から「ヤジマ、どうとときく。「これは私の郷愁をそります」といふ作文が合憎ドイツ語でできかかつてゐたが、少し気障だし翻訳がうまく出来ないので、「トレ・ピヤン」で片づけたのはまづかつた。

それから科学史学界などの話をする。日本の生活は楽でないだらうなどといふ話も出た。S教授が自分にどうやつて宿を見つけたかときく。エール・フランスへ頼んで種々注文したことを話す。感心したやうな顔をされたと思はれた。ホテル代をいふと、それでも安くはないといふ表情をしたらしく思はれたので、風呂つきだといふ。はあ、ここでは湯は一週三回しか出ないが、湯の代が月に三千フランだといふ。パリの生活も楽ではないらしい。

H教授は明朝出発の支度があるからといって十時ごろ別れを告げた。S教授が彼もレフェジーだといふ。自分は大きくうなづいた。今度は夫人がいろいろ話しかける。夫人はむろんロシア語もできる。「ツシマ」といふのはあれは駄目だといふ。それは日本で訳されてゐると思ふが讀んでゐないと答へる。日本にはサムライがあるかといふので、今はないと言つたら、でもレオパールはやつぱりレオパールだといふ。夫人はデモクラシーを信じない人のやうだ。

そのうちに十一時になつたから辞去する。さつき子供があるかときいたとき、三人あつて大きいのはフランス語を習つてゐると言つた。歸るとき夫人がその長男に持つて行つてくれと言つて「ポーランドのアンジューの百合」といふ本を贈られた。教授は次の大會で會ひませうと固い握手をした。

パリ日記(六)

『ももんが』一九九〇年一〇月号

一九五〇

九月八日 金曜

今日はからりと晴れてゐる。昨夜S教授のところであんなに天気がわるいのは例外的だと言つてゐた。

今日はカルナヴァレー博物館へ行く。ここはパリの歴史に関するミュゼーだ。バスチーユから地図を見ながらその見当へ歩いて行くとヴォージュの広場が見えたので入ってみる。その入口に「メーゾン・ドウ・ヴィクトル・ユゴー」と書いてあつた。公園を一周りして外へ出ると、間もなく博物館の前へ出た。横へ廻つてみるとユゴーの学んだ学校といふのがあつた。その直ぐ隣りに小公園がある。そこで少し休み、それから博物館へ入る。

初めの室には十八世紀ごろのフランスの商店の模型がある。次にコスチュームが沢山ある。ルイ十五世時代とか種々の時代の服装が人形に着せたり、ただ置いたりしてある。絵もある。二階には革命時代のものがある。ギヨチンの模型のある室はちよつと凄いい。逮捕状や何月何日ギヨチンにかけるといふ判決文などもある。別の室にバスチーユの模型が二つある。監獄を破壊するとき用ひた槍や縄梯子などもあつた。また別のところにはユゴーの手紙、シヨルジュ・サンドの手紙や手型や種々の所持品がある。シヨパンの手石膏もある。十二時近くまでかかつて見る。出るときもう守衛たちが閉める用意にかかるところだつた。

其処を出て少し行ったところに本屋があつたから覗いてみる。ローマの案内書が見えた。せんだつてソルボンヌにあつたが、その店は昼休みでしまつてゐた。初め目についた薄いの見せると言つたら、それを出して更にこちらの方がコムプレだと言つてアシエットのを出して見せた。それを買ふ。六百フラン。

これからヴァンセンヌの森へ行かうと思つてサン・タントワーヌ街をバスチーユの広場の方へ歩いて行くと、今まさに広場へ出ようとするところで後ろから来た青年がシャラントンへ行くのはどつちかと言つてきいた。見ると少し田舎からでも出て来たやうな十八九と恩はれる若者だつた。メトロかとぎくと歩くのだといふ。ヴァン

センヌの森に行かうと思つて地図はよく見てあるから、大体真直ぐ向うの通りをいけばいいのだと思つた。シャラントンはヴァンセンヌの森の直ぐ南だ。しかし真直ぐ向うといつても二つ道がある。どつちか確かめるため地図を出して、あれだらうと指し示した。パリで道を教へるとはたいしたものだ。

アヴェニュー・ドームニルを歩く。暫く高架線に沿つて、やがてそれと別れる。小さなプラスが一つあつて間もなく森が見えて来た。このあたりは余り賑かではない。森へ入るとすぐ左側にミュージゼー・ドウ・ラ・フランス・ドゥートル・メールといふのがあつた。それを見る積りなのである。その前まで行つて二時から開くことを確かめる。書飯にも少し早いので森の中へ入る。やがて池がある。水面が地面に非常に近いのは親しみ易い感じがする。水辺へ行つてみると水は浅い。縁にオーバーフローの口があつて、水が溢れ出てゐる。つまり水を補給して溢れさせ、水面を一定に保つてゐるのである。乳母車に子供をねかして本を読んでゐる婦人もあり、編物をしてゐる人もゐる。

一時になつたから引返して、さつき見ておいた公園の入口のレストランへ入る。余り大きい店とは思はなかつたが、入つてみると中は広いうちだと思つた。ところがさうではなかつた。三方が鏡なのである。二列にテーブルを並べてその両側が一面の鏡、それから真中の通路の突き当りも鏡なのである。これで広く見えたのだ。ホテル・スニイへ着いたときも鏡にだまされたが今日もそれだつた。大きな部屋の中程へ案内されたと思つたのが突き当りの一番奥だつた。こんなところでも大勢お客があると見えたが、実は四五人だつた。静かできれいな店である。テーブル・クロスもマチスの絵にあるやうな格子の美しいものだつた。これは少々高いなと思つたとほり、アラゴの二倍以上だつた。

二時になるのを待つてミュージゼーへ入る。これはフランスの植民地に関する博物館である。先ず十字軍がフランス人の海外に出た初めだといふので陳列はそこから初まる。時代分けが非常にうまく組織的にできてゐる。壁に大きく時代別が書いてある。アフリカ、インド、シナ等の詳細な資料と共に海外発展に尽した人の絵や像がある。各地の習俗などについてはトロカデロの人類博物館と重複するところもあるが目的は違ふわけだ。日本の田植や稲刈や脱穀などを模型で示したのもあつた。各種の資源とそれの精製法や応用を示したところもある。

ここできれいな反響をきいた。この建物の一部に数珠つなぎの室とでもいつたらよいやうな一連の室がある。円天井の一房があつて、その左右へそれより低く平らな天井の部屋があり、それから少し先にまた円天井の部分がある。その一つの円天井の下を静か

に歩いて行ったときポコン、ポコンといふ反響が段々に減衰しながらいくつ

も聞いた。音源は自分の靴が床を踏む音であった。上を見ると天井は球面の一部と思はれる形をしてゐた。同じ形の所がいくつもあつたが、或るところでは非常によくこだまし、別のところではさうでなかつた。そのあたりには見物人は殆どゐなかつた。

地下に水族館があるといふのでついで見える。ここにも日本の金魚がゐた。海亀の泳ぐところも見た。二階から裏手にある墓地が見えた。四時近くここを出る。また池の方へ行く。近いものを見たから今度は遠くのものを見ようと思ふ。他の周りを廻る。動物園がある。やはり子供または子供連れが多い。その中に人造のすばらしく高い山があるのが外から見える。子供が大勢のぼつてゐる。動物園である。

他の周りを歩いてゐる人や、釣糸を垂れてゐる人や、草の上に寝ころんでゐる人もゐる。たいがい石造か煉瓦作りの二階や三階や或はもつと高い所に二部屋か三部屋持つて暮らしてゐるのだから、公園は絶対必要である。一部屋に大勢住んでゐる人もむろんあるであらう。自分のうちの庭のあるのは特殊の人だけであらう。窓際に草花の鉢を置く位がせいぜいである。外へ出て大気を吸ひ、日光に浴し、草木を眺めるのは寧ろ生理的要求である。この要求に適ふやうに沢山のベンチや椅子が置いてある。町には大小の公園がある。ユゴーの学校の傍などは自分の見たもつとも小さいものである。みんな公園を大事にする。紙屑などは散らばつてゐない。芝生の中へ入るものもゐない。ルクサンブル公園などは特にきれいだが、あそこは入口に押せば開く鉄の柵があつて、犬と自縛車は入れないと書いてある。郵便局にも同じことが書いてあつた。ポルト・ドレーからメトロに乗る。ドームニルとプラス・ディタリで乗り換へてゴブランへ帰る。今日は昼食に余計払つたから、埋め合せに六十五フランの例の安煙草を買ひ、且つは日本を偲ぶことにした。

九月九日 土曜

窓を開けたら少し降つてゐる。傘を持って出かける。メトロでトロカデロまで行き、ミュゼー・ドウ・トラヴォー・ピュブリックへ行つてみたら十三時からとある。その近くにギャレリアといふ展覧会をするところがあるので探してみる。正面に次の展覧会は九月末日と書いてある。秋の展覧会はまだこれから先だ。河岸を歩いてノートル・ダムまで行く。お寺にはたいした興味がないので、このまへ外から見ただけで中へ入らなかつた。今日は入つてみようかと思ふ。入口で花嫁花婿に会ふ。しかも三組も会つた。真中が礼拝所で椅子が置いてある。向うの正面にはステンド・グラスが見える。

周りの薄暗い所には蠟燭がともつてゐて、よく見ると種々の聖像が置いてある。西洋

といふものが身近に感じられるやうな気がする。異教徒はさつさと出ることにした。磔上のキリストを見るのは私は余り好きではない。

出口に袋を持った尼さんがゐたが一文も入れなかつた。隣りを歩いてゐた人も出さなかつた。三十フラン出して塔へ上る。階段がずゐぶん沢山ある。途中に窓があつて下界が見える。上りきつたところに例の怪物と言はれる石の彫刻がある。大きなものではない。雨に煙るパリの町を見る。少し離れたところに大鐘がある。入口を覗いたら中へ入つて見るといふから入る。十フラン置く。

下りたら雨が強くなつたので塔の軒下で暫く雨を除ける。小降りになるのを待つてセーヌ河を渡りそこで暫く休む。それから南岸を歩く。ひるまへ北岸を歩いてゐるときはまだ雨はいくらも降つてゐなかつた。釣りをしてゐる人が何人もゐた。いまだ嘗て釣り上げるところを見たことがない。釣れない魚を釣つてゐたり、いまだにガス燈をともしてゐたりするのがパリかも知れない。釣竿の袋を犬にくはへさせて自分は魚籠か何か持つて煙草を吸ひながら歩いてゐるをぢさんもあつた。忠犬八公は時々主人の方を振り返つて見る。主人がここぢやないとでも言つたのか犬はいそいそと歩き出す。フランスの犬はフランス語が分ると見える。顔つきは日本の犬と別段変りはない。

雨の降つてゐるセーヌ河を見ながら歩いてゐるうちにアンヴァリッドまで来た。丁度時間はよし、ロダンのミュゼーへ行く。ここは一時半からだ。入つてすぐ右側に建物があつて案内人がそこだといふ。考へる人、カレーの市民、バルザックなどを見る。ハナコといふのもある。そこを出てみると門から正面の奥にもう一つの建物がある。事務所か何かのやうにも見えたが、丁度その近くに立つてゐた守衛にあれも博物館ですかときくと「ミュゼー、オーシー、ヴィジター！」と答へた。またここで傘を預ける。さつき預けて五フランやつた。道理で三十フランの入場券に五十フラン出したらお釣を十フランと五フラン二枚くれた。ここでまた五フランやれば丁度よい。もつとも傘を預けたら五フランと定つてゐるわけではないが、自分はさう定めてゐるのだ。下らないことを考へながら入つてみる。こちらはブロンズや小さい習作が多いと思つたら、段々行く。と大作も沢山ある。「瞑想」といふ少女の顔はよい。マルスラン・ベルトローの胸像もある。ファン・ホーホのタンギイ爺さんはここにあるのだ。

出るとき傘を受取つて五フランやつたら「メルシー・ポーカー」と言つた。まさか五フラン以下もやれまいし、また持つてもゐなかつた。それからアンヴァリッドへ行く。正面から中がざつと見える。ナポレオンの墓はたいして興味もないが、来たほどに三十フランの入場券を買つて入る。実に壮麗なお堂だ。大理石の立派なのが使つてある。眞

中にナポレオン一世の棺があり、周りに二世やルイのがある。フォッシユ元帥のもある。それは兵士が担いでるのである。昔のにかういふ形式のはある。堂の中を歩いてゐると遠くで大勢の人が読経してゐるやうな感じがした。これは見物人の足音や話聲が天井や壁で反響してその集りのなす音であらう。

裏の方に陸軍博物館といふのがあるがこれはやめた。大砲などはお堂の裏の野天に置いてあるのを先日遠くから見た。アンヴァリッドの西側を通つて河岸へ出る。雨はまだ降つてゐる。アンヴァリッド橋を渡つてクール・アルペール・ブルミエを歩く。マロニエの実が美しいので一つ拾つた。それからトロカデロの近くのミュゼー・ドウ・トラヴオー・ビュブリックへ行く。今朝行つたら午後一時半からと書いてあつたところだ。これは土木や何かの博物館である。美しい橋の模型がたくさんある。フランスの橋は実に美しい。それから港湾の大きな模型がある。ルアーブルだのマルセーユだの方々の有名な港がある。汽車や電車の模型も沢山ある。動くものもある。動かして説明してゐる。自分は聞いてもよく分らないから勝手に見て廻つた。二階には天然資源の應用のことがある。鉱山の中を示した模型や石油や石炭を掘るところ、鏡石の採取などを絵と写真と模型で示してある。地階には水力電気や何かがある。発電所のところではいかにも発電所のやうな騒音を発してゐたのは中々凝つてゐる。ほかでもさうだが、ここは特に廉い所を使つてゆとりのある陳列をしてゐてよい。子供を連れて来て見せるに適してゐる。現に子供の入場者が多かつた。

ここでも傘を預けたのでいくらかやらなくてはなるまいと思ふ。ところが二十フランより小さい持ち合せがない。入場料が二十フランだから傘の番に二十フランはやれない。それでお釣をとることにした。五十フラン出して小さい金を持つてゐるかといふと「ウイ・ムッシュ」「とばかり二十フラン二枚と五フラン二枚寄越した。そこで五フランやる。「メルシー・ムッシュ！」

時に四時少し過ぎだ。それから西南の方へ少し行けばバルザック博物館がある筈だ。地図を見ながらリユー・レーヌワールといふのを歩いて行く。地図に誤りがなければこの通りにある筈だ。しかし実際は引込んでゐるのかも知れない。きいてみようかと思つたが、もう頭がだいぶ疲れてゐる。ロダン美術館でいいものを沢山見てきたから今日はやめにした。バルザックはどうせ原稿とか本とかそんなものだらう。

そこでトロカデロへ戻り、いつか入つたレストランで茶を呑む。きちんとした身なりをした人もむろん大勢歩いてゐるがいさうでないのもたまにはある。わるい身なりの婆さんが歩いてゐると思つたら屑箱の中へ手を突込んだ。獲物はなかつたらしい。或は何

かあつたのかも知れない。屑箱はガス燈の柱の根元に小ぢんまりしたのがついてゐる。柱と同じ暗緑色に塗つてあるから余り目立たない。かういふ婆さんもゐるのだ。せんだつてこの店で茶を呑んでゐたときには何処かのマダムが自動車を自分で運転して乗りつけた。このすぐ隣りに家具屋がある。しばらくすると店員が子供の椅子か何か運んでその自動車へ積み込んだ。マダムは運転台に乗り込んだ。店員が会釈してゐるのを尻目に自動車はすーつと滑り出して行つた。かういふ婦人もゐる。向うの並樹の葉がだいぶ濃い褐色になつてゐる。もう夏服は少し涼し過ぎるやうになつた。来週は帰らなければならぬ。

さつき毛並の美しいライオンのやうな犬を連れて歩いてゐる黒作りの婦人があつた。通りかかつた若夫婦だかさうでない若い男女だかがあつた。女の方が「シアン、……」と言つて相手に話しかけてゐた。「まあ、すてきな犬」とでも言つたのかも知れぬが「シアン」のほかは聞きとれなかつた。自動車で乗せてもらつて家族の一員として済ましてゐる犬もある。レストラン・アラゴーには猫がある。傍へ来ておとなしくしてゐるので鶏の骨を手のひらへせてやつたら手に触らないやうに上手に食つて向うへ行つた。

アラゴーのメニューもいくらか分るやうになつた。そればかりか、パンを少し残しておいて、あとでそれをフロマージュで食ふこともいつの間にか覚えた。食卓で向ひ合せになる赤いネクタイのをぢさんがいる。いつか他に席がなかつたと見えて、自分の前へ来てかけた。ちやんと「ムツシュ」と言つてかけるから感心だ。日本ではのつそりかけるのが普通だらう。こつちも先に帰るとき「ボン・ソワール・ムツシュ」といふ。向うもさういふ。気持がよい。その次のときも自分の前へかけた。まだ話するには到らない。

さつき町の新聞売場の前を通るとき、北鮮軍の攻勢は馬山でストップと書いてあつたのがちらと見えた。ゴブランで買った「ソワール」の六版に南鮮軍が成功的に攻撃と出てゐる。ゴブランでいつも新聞を買ふ爺さんといつてもそんなに年寄ではないが、一は片目であることを今日発見した。その反対側に若い男が天気なら野天で売つてゐる。これはひどくつんとしてゐる。同じ場所に女が売つてゐることもある。この前の日曜に「ソワール」などは休みなので、何かないかと思つたら「ジュルナル・デュ・ディマシユ」といふのを売つてゐた。十フラン出したら十二フランといふ。五十フランのぼるぼるの札をやつたら、すかさやつにして見ながら何かぶつぶつ言つた。「ひどい札だねー」とでもいつたのだらう。さうしてわざと選んだのもあるまいが、同じやうに傷んだ札と小銭の釣をくれた。フランスだつてむろん種々の程度の間がある。その反対側つまり片目の対角線のところにはキオスクがある。パリに着いた日に「切手をお持ちか」

と聞いたなら「パッセー！」と言った女だ。向側へ行け、といふ意味だらう。そのときは見つからなかったが、向側の少し入ったところに郵便局があるのをあとで知った。

この女もあまり感じはよくなかった。ここに婆さんがあることもある。あの女のお袋も知れぬ。朝などは男がある。亭主だらう。

新聞は最も多く「ソワール」を買ってゐたが、或る朝たまには変った新聞を、さうして朝のを買はうと思つてそのキオスクの前へ立つてどれにしようかと考えてゐた。すると勤めに行くらしい娘さんがさつと「リュマニテ」を買つて行つた。ははあ、あゝいふ娘さんがこの新聞を買ふのかと思ふ。これで決心がついて自分もそれを買ふ。当り前のことだらうが、朝鮮のことはこの新聞には余り出てゐない。その点は「ソワール」が大きく取扱つてゐたのでたいい「ソワール」にした。オランダにゐたときは朝鮮の戦争が気になつて毎日切抜いてゐたが、パリに来てから気がゆるんで切抜きはやめてしまつた。それでも見るときはそこを第一にする。

昨日の新聞にスコットランドの銀山に山崩れか何かの事故があつて鉱夫が生理めになつたと出ていた。今日で見ると陥没らしい。百二十八人まだ救助されないさうだ。ルネ・クレールの「ラ・ボーテ・デュ・ディアブル」がパンテオンへ出た。ソルボンヌの西側の通りだからここから近い。明日の日曜はブローニュの森へ行つて帰りにそれを見ようかと思ふ。

パリ日記（七）

『ももんが』一九九〇年一月号

一九五〇

九月十日 日曜

雲が多いが降つてはゐない。メトロでオデオンまで行き、クルーニ博物館をさがしたらソルボンヌ大学の真ん前だつた。ここなら何遍も通つたのだが、気にとめなければ分らないものだ。十時から十二時、十四時から十七時まで開くとある。十時にはまだ十五分ばかりある。このあたりには本屋がいくらかもある。日曜でしまつてゐるけれども、シヨウウィンドウを覗く。プレス・ユニヴェルシテールの雑誌部を見つけた。ここは前にも見たのだが、雑誌専門の部があるとは気がつかなくつた。そこに我々の関係の雑誌がある。明日来なければならぬ。これはクルーニのすぐ斜め前だ。もう一軒同じくプレス・ユニヴェルシテールと看板の出てる店がソルボンヌからサン・ミシェルへ出る南側の角にある。そこへ行つてみたら同じ雑誌が飾つてある。単行本はここに沢山ある。

そのうちに十時になつたので博物館へ入る。ここは古いもののミュージーだ。古いチャペルの模型だの、シャルパンティエつまり彫物のしてある細工ものなど、こういうのは東洋のと似たところがある。図柄は西洋だが、木に貝をちりばめたいはゆる螺鈿の技法は東洋から傳はつたものではあるまいか。そのほか壁かけ、敷物、古い劔、兜などがある。その構内に古井戸がある。鉄の櫓のついた車井戸だ。水を受けるところが魚のやうな形に石を彫つたものだ。

三十分くらゐでここを出て、また本屋を覗いて見る。パンテオンといふ映画館はすぐ分つた。十四時、十六時、……からとなつてゐる。メトロでオートイユまで行き、プローニユの森へ入る。ドンゲンの繪にあるやうに馬に乗つた人がある。小道を歩いてゐたら、向うから馬に乗つた人が来るのでひよいと上を見ると、乗馬者のための道と書いてあるので急いで人の歩道に出る。「ラック」と書いてある道案内について歩いて行く。美しい森だ。やがてラックへ出る。ラックといふと湖水と訳したくなるが池と言つた方が適切だ。魚を釣つてゐる人がある。大勢釣糸を垂れてゐるところに立札があるから、まさか禁を破つて釣つてゐるのではあるまいとは思つたが、讀んでみると、ここは魚釣りのために特にレザーヴしてある所だと書いてある。特に エクスクルーシヴマン と断はつてある。ここで魚つるべからずといふのは天地雷壤の差だ。

自動車で乗りつけて草原で遊んでゐる人もある。草原で自動車のなかの敷物をはたいてゐる奥さんもある。自轉車で来てゐる人もある。むろん歩いて来る人もあるだらう。今日は何も無いが、大きな運動場もある。もう少し行くと第二の池がある。そのあたりで小雨が降り出した。雨の中を歩くのはもう堪能したから歸らうと思ふ。さつきと別の道を通つて、オートイユの方へ出る。そこは森の東の端である。立派な建物がある。アパートらしい。この辺のアパートになると隣との間がすいてゐて草花の植はつた庭がある。大きなうちはやはり犬を飼つてゐるとみえて一度吠えられた。柵の中ではあるが、余りいい気持ちはしないものだ。

オートイユのプラスへ出る。雨はたいしたことはないので、其処のベンチへかけて休む。少し間をおいた隣のベンチに青年がぼつねんと腰かけてゐる。暫くすると向うから赤い着物のお嬢さんが笑み傾けてやつて来た。なんだ、待ち合せか。やがて二人は立ち去つたらしい。ボアへ行つたのだらう。煙草をふかしてゐると犬が通る。つなかれた犬であるが、街燈の柱へ小便をひつかけける。俗説によるとあれは自分の通つた路を覚えるためだといふ。しかし小便が足へかかるのを避けるため何かにひつかけけるのではあるまいか。見よ、馬は小便をするとき脚をできるだけ開いて飛沫のかかるのを少なくするではないか。

オートイユの廣場に葉が櫻に非常によく似てゐる木がある。木肌はちがつてゐる。通りの木は主にマロニエである。いまちようど方々に実がおちてゐる。きれいで栗のやうだから拾つてみたくなる。昨日一つ拾つて来た。そのうちに十二時半くらゐになつた。メトロでオデオンへ戻る。サン・ミシエルのレストランで休む。ちようどすぐ前の街燈の根元をしきりに嗅いでゐる犬があつた。それから徐るにひつかけた。しかもそれはほんの少ししか出なかつた。してみると例の俗説も急に破ることはむづかしさうだ。小雨がまた降つて来た。

二時少し前にそこを出て、すぐ近くのパンテオンといふ映画館へ入る。小さくて気持ちのよい館だ。初めにニュースがあつて朝鮮の戦争も少しあつた。次に文化映画で海中撮影だつた。非常に骨を折つた撮影である。魚群が流れて行く。潜水夫が魚 たしか鱈を追つかけるところや、亀を捕へるところもあつた。ルネ・クレールの「ラ・ポージェ・デュ・ディアブル」は「ファウスト」から取材したもので脚本はマルセル・マルスナック、本屋にあつたやうだつた。ミシエル・モルガンがマルゲリットを演じてゐる。言葉がよく分らないのが残念だが、それでも面白いと思ふところもある。会話がよいのに違いない。四時数分前に終つた。或る人々は静かに拍手してゐた。あれはよい。

日本でもやるといい。作者がゐなくなつて感心したら拍手を送るのがいい。

サン・ミシェル街へ出てルクサンブル公園へ入つてみる。日曜で賑かだ。今日は噴水が出てゐる。眞直ぐ前へ出てアヴェニュー・ドウ・ロブセルヴァトアールを歩き、天文台の入口まで行つてみる。門の中にルヴェリエの像が立つてゐる。天文台の静かな並樹路をゆつくりと歩き、ポール・ロワイヤール通りへ回る。アラゴー通りまで行つて「デイマンシュ」を買ひ宿へ帰る。スコットランドの鉱山で生理めになつた鉱夫は救助されたさうだが、一二八名中一二名は死亡した由。

今夜また赤いネクタイのをぢさんが僕の向側へ坐つた。フランス人は勘定書だけ拂ふのかと思つたら、このあいだ向うの方にゐた青年は何がしかの札を置いて行つた。この勘定は気楽だ。「アディシオン」といふと紙と鉛筆を持つて来て、こつちで何と何といふのを書き出す。自分が運んだのだから大体は覚えてゐるが、「それから何？」ときくのだ。それから鉛筆で数字をつつきながら寄せ算をする。文字通りアディシオンだ。

九月十一日 月曜

今日は快晴、窓をあけてみたら殆ど雲がない。朝出がけにチップを固めて渡し、ほかに拂ふものはないかきく。残つてゐるフランスの金をうまく使ふことが今日の課題だ。むろん使い道に困るほど残つてゐるわけではない。少なければ少ないほど有効に使ふことが重要なのだ。また今日はパリの仕上げをしなければならぬ。それにはルーヴルをもう一度見るのに越したことはあるまい。

その前にソルボンヌへ行つて昨日見ておいた雑誌を買ふ。續いて出る分を送つて貰へまいかと頼んだら断はられた。それからルーヴルへ入る。ギリシア、ローマの彫刻をもう一度見る。次に繪画のところへ行きラファエルやレオナルドを見る。このまへジョコンダの模写をしてゐた婆さんがまだ描いてゐる。熱心なものだ。このあひだよりもつと正面へでしやばつてゐる。ルネッサンスと近代の彫刻のところはこのまへ閉める時間にひつかかつて見られなかつた。今日ゆつくり見る。写真で知つてゐるミケランジェロの奴隷を見た。写真で見るとき異なる方向から写したにしても変だと思つてゐたが、これは二つあるのだ。それからカルポーヤその他のものを見る。更に十九世紀の繪画のところをもう一度見て外へ出る。

ルーヴルの石の腰かけで一休みし、すぐ北側のパレー・ロワイヤールへ行つてみる。その中庭の噴水から勢いよく水が出てゐてしぶきが飛んでゐた。周りのベンチにはたいがい人がかけてゐる。このパレーの一部にオペラコミックの事務所があるやうだつた。

ここを出て、チュイルリー公園へ入り、一二度休んだことのある茶店でコーヒーを呑む。子供が飛行機を飛ばせてゐる。うまく出来てゐると見えてよく飛ぶ。一度木にひっつかつた。かなり高いところだつた。近くにある大人が揺すぶつて少し落ちたが途中へひっつかつた。持主でない少し大きい子供が木に登つて取つてくれた。

茶店はマロニエの木立の中にある。音がしたから何かと思つたら実が落ちたのだ。通りかかつたお婆さんが何か言ひながらそれを拾ひとり、木の方を見上げてまた何とか言ひながら、それを大事さうに持つて行つた。あんまり美しいから誰でも持つて行きたくなるのだらう。あのお婆さんはあれを蒔くところがあるのか知ら。

コンコルド広場へ出ようとすると所に見水塔がある。真中に噴水塔があつて、大きな水盤の形をしたあれだ。子供が玩具の船を浮かべてゐる。何かのフランス映画にさういふ場面があつたが、よく見る情景だ。貸ヨット屋のあることを発見した。車にいつぱいヨットを積んで傍に女が立つてゐる。貸ヨットに違ひない。ヨットは一尺くらゐのだ。帆はもう少し長い。それと同じやうなのがいくつも浮かんでゐる。手を離れてしまへば自分のも他人のも区別はないやうなものだが、あれは自分のだ、どっちへ行くかな、早くはしればいいなどといふ興味は所有につながるものであらう。岸から離れて行つてしまつたら取り戻すのに困るだらうと思ふが、まだ誰も水の中へ入つて行くのを見たことはない。しばらく待つてゐれば何処かの岸へ吹き寄せられみのだらう。また若し風がなければ外側にオーバーフローのあるところへ寄つてくるわけだ。

金が残り少なくなつたから賑かなところへ行くのはやめた。セーヌ河の北岸を歩く。このあひだ雨の降る日に南岸を歩いてゐるとき、雨の中で店を開いている古本屋が一二軒あつて、その一つにモンゴルフィエの風船の版画を出してゐるのを見た。人は見えなかつたから反対側の軒下にでもゐたのであらう。雨はふつてゐるしきいてはみなかつた。それを思い出したので、橋を渡りその見当へ行つてみたらやはりそれが出てゐた。余り美術的ではないので買はずに他を見る。注意し出すといくつも見つかつた。第一回、第二回、第三回等々の上昇を集めたのもある。更に大きなものもある。大きいので色つきと無色のものもある、大きいのはちよつとよかつたが少々高いのと持つて歩くのに不便なので見るだけにした。もつとも金が足りなかつたのが根本問題であつて、大きいとか不便とかは否定するために思ひついた理由のやうであつた。

南岸をずっと歩いてジャルダン・デ・プラントへ入る。この中の並樹の刈り込みをしてゐた。実に面白い格好に刈つてゐた。両側にある木の枝が通りの上へ覆ひかぶさつてゐるが、その真中を垂直に刈り込み、その下は中窪に刈つてゐる。見渡すと散髪したて

のやうにすがすがしい。ここに限らず花壇の配置は頗る幾何学的である。ここに日本の萩があつて、ローマ字でハギと書いてある。また動物園に日本の鹿がゐてやはりローマ字でシカと書いてある。

午後いくらか雲が出たがよい天気だ。歩くとき暑いくらゐだつた。パリへ着いた日とその翌日が上天気で、明日立つといふ今日がまた上天気であつた。明日も大丈夫だらう。飛行機からアルプスを見たいものだ。今日はアラゴーが休みなのでサン・マルセル街の例の安いうちへ行く。食後プラス・ディタリまで歩く。雑誌を一冊買はうと思つたがパリの本屋は夜は休みだ。夜になると風が涼しい。少しひやひやすくらゐだ。爽かな風だ。木の葉が少し飛んでゐる。秋の風だ。

九月十二日 火曜

昨夜はあした七時に起してくれと頼んで早くねた。寝入つたところ電話のベルがズリズリなるので、もう七時かまだ早いやうだなと思ひながらスイッチを捻り、時計を見ると十二時だ。航空会社から電話で、飛行機がおくると言つてゐるさうだ。あくさうかと思つて寝てしまつた。

ベルが鳴つたので起きる。丁度七時だつた。八時十五分にアンヴァリッドのエア・ステーションへ来といふ約束だつたから七時に起きなければ間に合はない勘定だつた。起きてすぐ航空会社へ電話をかけてみる。何時間おくれるかまだわからないが、九時ごろになると確かなことが分るから、そのときお知らせするといふことだ。

クロアッサンは昨日で食ひおさめかとおもつたら今朝もう一度食へることになつた。いつものオウ・ロフ・デュ・カフェへ行って今度こそ最後まで三日月パンを食ひこーヒーを呑む。宿へ歸つて待つてゐると八時四十五分に電話がかかつて来た。飛行機はだいぶおくれるから午後三時十五分にアンヴァリッドへ来てくれといふのだ。午後三時といふとまだだいぶ時間がある。それではソルボンヌの本屋へいかう。しかし金を勘定してあとタクシーの分と僅かの用意しか残してないから、銀行へ寄つて金を換へて貰ふ。それからソルボンヌへ行く。サン・ミシエルのプレス・ユニヴェルシテールへ行く。二階に分類した賣場がある。胸算用をしながら本を選び出す。このくらゐで予算いっぱいと思ふところでアディションをして貰ふ。丁度よかつた。それを持つて宿へ歸る。

さて少し荷物が増えたわけだ。たいした買物もしないが、貰つた印刷物や少し買った本がある。昨夜詰めた荷物に入れ換へをしなければならぬ。それともし三十キロを越えると超過料金を拂はなければならない。それが重大問題である。ホテルに秤があるだ

らうが、そのくらゐ見当がつかなくては物理を習った甲斐がない。米の配給

が十五キロといふことは度々あつた。その袋が置きっぱなしになつてゐるのを片づけたことは再々ある。あれはちよつと重かつた。あれを両手に持った感覚でいいわけだ。または持つてゐて腕が疲れて行く速さでもいいだらう。出来た荷物をみんな両手にさげしてみる。大体大丈夫だと思ふ。少し超過して拂いきれないときは航空会社で貰つたアート紙の重い印刷物などは棄てるといふ覚悟である。

荷物ができたので晝食に出かける。やはりサン・マルセルのうちへ行く。歸りに散歩して雑誌を一二冊買った。これで予定をすつかり果し、思ひ残すことなし。ひるごろから雲が少し濃くなつて来た。飛行機が五時出発ではアルプスはもう見えないと思ふ。

三時十分前になつたからタクシーを呼んで貰はうと思つたら電話がかかつて来た。さうしてもう一時間おくれるから四時十五分に来てくれといふことだつた。何とパリが後ろ髪を引くことだらう。また航空会社は何ときちようめんに一々知らせてくれることだらう。今度は確かかときいたら確かだといふ。飛行場発は六時ださうだ。あと一時間では町へ出るほどのこともない。窓からパリの町を眺める。眼の下の青々とした並樹路を見る。

四時十分前に宿へ別れを告げる。例の小マダムが自動車まで送つて来る。マダムは今ぬないといふ。タクシーは来るとき三百フランだつたから四百フランやれば間違いないから。運轉手にアンヴァリッドまでいくらぐらゐかときく。メートルのことは分かっているが大体いくらかときいたら考へる様子だから、四百フラン出してこれでいいかといふと、むろん結構といふ。残つた金を小マダムに渡さうとしたら「ノン」と言つて取らないから「モン・ペールにだ」と言ふと笑つて「ア、モン・ペール」と言つて受取つてくれた。「オウ・ルヴォア」と言つて手を握る。また来たいんだが来られるかどうか、「オウ・ルヴォア・プロバブルマン」と挨拶した。車の外から「ボン・ヴォワイヤージュ」と言つてくれる。親切な小マダムだつた。

アン・ヴァリッドの驛で荷物を運んでくれた運轉手は手を差し出して私の手を握つた。年とつた運轉手だつた。荷物を測つて貰つたら三十キロと五〇〇グラムだつた。五〇〇グラムの超過はむろん料金をとらない。実にうまく行つたものである。やがてバスに乗る。バスは西南を指して走り出した。アムステルダムから着いた日にバスがシャンゼリゼーを通りエトワールの廣場を廻つたのはお客にちよつとパリを見せる仕組みで、航空会社がなかなか考へてゐることがよく分かる。やがてパリの町出る。フォンテンブローへ行く道を暫く走る。そのうちにオルリーの飛行場へ着いた。

飛行機は更におくれた。もう今日出なくてもかまはない。そしたらホテル・スニイへ戻る。しかし六時四十分頃出発した。高度千七百メートルで飛び、四時間後にローマへ着くとアナウンスしてゐる。

八時少し前にスイスのチューリッヒへ着いた。もう暗くて外は少しも見えない。四十分位休んで飛び出した。十時四十分頃ローマ着。税関などで時間がかかるから、バスに乗って町の中の航空会社のオフィスへついたら十一時四十五分くらゐになつてゐた。やはり航空会社へ頼んでその近くのアルベルゴ・ロマノといふホテルへ泊る。

部屋へ案内したボーイが「ベル？」ときく。なんのことかと思つたら「いい部屋だらう」と言つてゐると気がついた。イタリア語を知らないから「ウイ、ベル」と答へる。

九月十三日水曜

七時に起きる。よい天気だ。ローマは暑い。昨夜はかける夜具がないので驚いた。パリではもう毛布を重ねていたのである。ホテルのレストランで朝食をとる。コーヒーは一杯ついでだけ、パンは栗まんじゅうくらいのが二個、それにバタとジャムが少しあるだけだ。これでおしまひかときいたら、そうだと言っているらしい。

エーレ・イタリアネといふ航空会社はすぐちかくだが、フィリップ・エア・ラインの窓口はまだ開いていない。KLMの方に人がいたからきいたら八時半に開くという。少し町を歩く。九月二十日通りというのを通ってピアツァ・デイ・キリナーレという広場まで行く。PALへ戻ってみたらまだ開いていない。もう一人の人にきいたら九時だという。九時は博物館の開く時間だから、そっちへ先に行くことにする。そこにとまっていたタクシーにヴァチカンの博物館までいくくらいかときく。六百リラだという。乗る。九時十五分前に着いたから早過ぎると思つたら、どうして、千人以上の人が列を作つて開くのを待っている。その行列が讚美歌だかなんだかきれいな合唱をしていた。さすがにローマである。僧服の人も行列にだいぶ混っている。行列につながつて待つ。間もなく合唱は終わった。あたりを見廻すとフランスの旅行クラブの徽章をつけた人がいっぱいいる。すばらしく大きな団体らしい。

やがて開場になった。一九四九年版の案内書には入場料四〇リラと書いてあつたが一五〇リラだつた。ゆるやかな廻り階段を登る。ローマ時代の彫刻が沢山ある。みんなりっぱなんだろうが、ゆっくり見ている時間がない。なるべく団体をすり抜けるように急ぐ。ラファエルの絵も見た。システインというチャペルは立派である。天井に、ミケランジェロの絵がある。周りには壁画がある。最後の晩餐もあるが、むろんこののはレオナルドではない。レオナルドの最後の晩餐をゴッランド織にしたのが別のところにあつた。絵画館にはラファエルのキリスト昇天の図があつた。レオナルドの聖ジェロームがあつた。

ずいぶん急いだが十一時までかかった。出るとタクシーがいる。さっきの男だと思つ

て乗ると別人だった。まるで同じに見えたのはイタリア人の見分けがまだつかないのがある。さっきのは左の方にメーターがあつたが今度は右にあるから確かに別の車で別の人だ。「ミュゼー・ドウ・ローム」といったがはつきりしないので「ピアッツァ・ディ・チエルキ」と付け加へたら合点して走り出した。ここだと言って下ろされたところはフオロ・ロマノであつた。これも見たいものの一つだから丁度よい。入場券を買ったら一六〇と書いてあるのに一七五リラとられたことはお釣から確かである。ローマ時代の遺跡がいっぱいある。凱旋門もある。古物の博物館というのがあるので入ってみる。墓から掘出したものなどが並べてある。コロセウムはすぐそこに見える。そこを出てコロセウムを見る。一周り廻つてみた。その傍の高台へ上つてみる。さっきヴァチカンの博物館からもよい眺望が得られた。

コロセウムからピアッツァ・ディ・ヴェネツィアの方へ歩く。大きな殿堂がある。ヴェットリアというのだ。その前にエマヌエル皇帝の大きな銅像がある。そこを見る前に、さつき自動車から見えたトラヤヌスの柱が見つかったから傍へ行つてみる。柱の周りへ螺旋状に浮彫したもので、パリのヴァンドームの柱はこれを原型とするものだらう。柱をみているとき絵はがき売りの少年がつきまとつて来た。黙っていたが、いらぬから「メルシー」と言つてやつたら、口の中で「メルシー」という言葉を小聲に言つてみてあきらめた。

それから高い石段を登つてヴェットリア殿堂の正面へ出る。正面に大戦の戦死者の霊がまつてあるらしい。花輪が捧げてあつた。その両側に兵士が剣をつけて立番をしている。初め人形かと思つたら、生きている兵隊だつた。イタリアは戦争を放棄しないとみえる。役所のような所に兵隊の立つているのも見た。何か軍関係の役所だらう。

イタリアはまだ夏だ。交通巡査は白い服を着ている。フランスのように棒は持たない。手だけで合図して交通整理をしている。ただの巡査は鼠色の服を着ている。ローマの町は埃だらけだ。半日歩いたら靴が白っぽくなつた。これでは靴みがきが要るわけだ。そういう映画がある所以だ。

腹がへつて来たのでなにか食をうと思つてピアッツァ・ディ・ヴェネツィアの方へ行く。そこは目抜き場所の筈だが、喫茶店やバーはあるけれどもレストランは中々見当らない。食料が不十分なせいかと思う。やっと一軒見つけて入る。イタリア語が分からないから「デジュネー」と言つたらメニューを持って来た。ヴィアンドとかサラダとか言つてくれるのでそれらを注文した。持つて来たのを見たら驚いた。肉は肉だがぢゅつといためただけのものでなにも添物がない。サラダはサラダ菜の上へマヨネーズを薬ほ

どたらしたのである。それら食べてパンを二つ食ったが、朝が軽いので足りない。はて次は何を食をうかと思つていと隣りの席でイタリア娘らしい二人連れがスパゲッティをうまそうに食つてゐる。そうだ。ローマへ来てスパゲッティを食うのをすっかり忘れていた。早速注文する。これはうまかつた。見るともなく見ると娘さんたちは持参したらしいパンをちぎつてその中へ混ぜたりなにかして食つてゐる。それと果物を何か食つておしまいらしい。自分はコーヒーを呑んでおしまいにした。コーヒーも余り結構ではなかつた。それで八二〇リラだ。昨夜空港で十ドル換へてもらったのが六千五百リラであつた。

昨夜税関ではおかしかつた。現金で二十二ドル八十セント持つてゐると言つたら係員が笑つていた。これから東の端の日本まで帰るのにそればかりしか持つていないのかという意味で笑つたのではないかと思つた。もしそうだとすれば皮相の見である。ローマで一日の滞在費を十ドルと見て、あと十二ドル八十セントある。飛行機へ乗つてしまえば殆ど銭は要らないのだから、これで優に日本まで帰れるのだ。またこれだけ残して使つのは中々骨を折つたところなのだ。そんなことを説明したところで始まらないし、言葉が下手なのだから黙つて笑つて任せておいた。

そのうちに二時ごろになつたから航空会社へ行く。パリで予約はしてあるが顔を出して今夜乗ることを言つておかなくては危い。行つてみると誰もいない。他の会社のところできいたら三時頃来るといふ。しかたがないからピアツァ・デセドラといふところへ戻り小公園の茶店で茶を呑む。ここのレモン・ティーはすてきにうまかつた。前の方に噴水がある。暫く休んで三時近くなつたからPALへ行く。まだいない。KLMできいたら四時頃でなくては来ないだろうとのことだ。宿へ歸つて出直そうかと思つたが、其処の椅子で少し待つてみることにした。三時四十五分頃にその事務所へ何処からかお嬢さんが現はれて来たからPALかときいたらそうだといふ。パリで頼んであるマニラ行のことを話す。晩の七時三十分に来てくれといふ。これでやつと済んだ。

さつき茶を呑んだところに馬車屋のたまりがあつたのを思い出した。そこへ行つて馬車屋に「カムボ・デイ・フィオリを知つてゐるだろう、ジオルダノ・ブルーの銅像のあるところだ」といふと「イエス・サー」とか何とか答えたので馬車に乗る。石を敷きつめた街路を馬がパカパカ走つて行く。いい気持になつて町を眺めながら乗つていた。下りるときメートルが三三〇と出たから三三〇リラかと思つたら、その下に換算表があつて五〇〇リラだといふ。ひどく高い。得意になつて乗つて来たまではよかつたが失敗した。距離はいくらもない。今朝ヴァチカンの帰りのタクシーが四〇〇リラだつたがその三分の一もないのだ。

「カムボ・デイ・フィオリ」は「花の広場」の意味であるが、屋台店の花屋が三四軒出ていた。少し場末の感じの広場である。真中にブルノの銅像がある。頭巾をかぶって手に本を持つている。ここはジオルダノ・プルノが一六〇一年に火あぶりの刑に処せられたところで、一八八九年にこの銅像が立てられたのである。暫く眺めて帰る。すぐそこがヴェネツィア広場なのだ。

ぶらぶら町を歩いて宿へかへり暫く休む。宿の払ひをして、七時に立つとを知らせ、また外出する。少しばかり残っているイタリアの金を処分することを考へる。煙草を買ってコーヒーを呑んで菓子を食ったら丁度うまく片づいた。七時宿へ戻り荷物を貰って、すぐ近くの航空会社へ行きそこで待つ。九時ごろまで待たされ、バスで飛行場に行く。十時二十分ローマ飛行場発。

九月十四日 木曜

起されたので、もうリダかときいたらそうだという。空がだいぶ明るくなって来た。時計を見たら四時だ。もつともこれはGMTである。リダで下りて朝食をとる。

六時頃出発する筈であったがエンジンの具合がわるいといって下ろされた。だいぶ長く待つ。結局出発はひる過ぎになった。飛び出すと間もなく眠ってしまった。夜の九時カラチにつく。約一時間休んで出発。

九月十五日

朝カルカッタにつく。カルカッタの便所へ行ったら、しゃがんで用を足す式で日本と同じだ。これも日本人の南方起源説の一つの根拠にあげてあったかと思ひ出す。カルカッタ発もだいぶおくれた。マニラ着は今夜の十時頃だろうとのことだ。印度の上で少し揺れた。シート・バンドをしめるといふ信号が出た。たいしたこともない。飛行機の上ではおおかた眠ってしまった。マニラ時間の十一時頃マニラ着。明日の飛行機は晚十一時発の由。パリの会社で教えてくれたのでは其の時間に東京へ着くことになっている。発と着を見違えて教えたのかも知れぬ。しかし、間に合うから差し支えない。航空会社で案内してくれたホテルへ泊る。

九月十六日 土曜

東京着の時間がちがっていたので朝うちへ電報をうつ。今日は一日宿で休養。パリで買って来た雑誌などを読む。夜十一時マニラ発。

九月十七日 日曜

昨夜は窓から星が見えたのでそれを見ていたら中々ねつかれなかった。星の位置が余り変らないから真直ぐ進んで居り、且つ揺れないことがわかる。少しうつらうつらしたと思っただけで沖繩着。マニラで合せた時計の四時十分頃だった。一時間進めて五時十分にする。小一時間で出発。十時半頃富士山が見えて来た。それから羽田へ着くまで暫く時間がかかる。これではよい目標になる筈だ。十一時二十分羽田着。

付記

一九五〇年には海外渡航は簡単ではなかったので帰って来るとあちこちから原稿を求められ次のようなものを書いた。それらには日記の一部を使っているが、日記の全文を發表するのはこれが初めてである。(一九九〇)

- アムステルダムからパリへ 「東京理科大学新聞」 一九五〇・一〇・一
- オランダの印象 「読売新聞」 一九五〇・一〇・四
- ケイの古本屋 「図書」 (岩波書店) 一九五〇・一一
- ブローニユの森 「電信電話」 一九五〇・一二
- オランダ日記 「図書新聞」 一九五一・四
- マルケンとフォレンジム 「郵政」 一九五一・四
- フォンテンブローの森 「アララギ」 一九五一・七

